

慈濟

ものがたり

ツーチー 2020年5月 281



仏誕節の祈り



四大元素の不調でウイルスが拡散しています。

大覚者である仏は衆生を憐れみ、地球をなだめ、慈悲と智慧で以て善なる行いを教えています。

仏と親と衆生の恩に感謝すべきです。

仏に懺悔し、大地に感謝するのです。

齋戒と菜食で疫病を鎮めましょう。

●扉の言葉 訳・済運

2020年5月10日
仏誕節と母の日、慈済の日

仏教慈済基金会



オンライン
灌仏会を行い



COVID-19の感染が深刻化している。台湾に数多くある慈濟拠点では、2月から布製マスクやマスクカバーを作り始め、健康な一般大衆に提供する一方で最前線の医療従事者のために在庫を維持している。ここ台南市善化区の慈濟連絡所でも感染拡大を防ごうとボランティアは自ら両手を動かしてマスクを作っていた。(撮影・黄筱哲)



慈濟日本サイト

目次

【編集者の言葉】

心の防疫

慈願／訳 4

【特別報道 COVID-19】

共に伝染病に打ち勝つ

済運／訳 8

全世界の慈濟ボランティアが動き出した

善耕／訳 10

マスクでケアする

済運／訳 14

医療を護る衣服を届ける

有田夏子／訳 28

武漢と共に難関を乗り越える

心嫻／訳 33

【国際慈善 ラオス】 (中)

貴重な「原種」が農民を元気付けた

善耕／訳 38

【特別報道 慈懿会】 (上)

世代をつなぐ学びの絆

有田夏子／訳 50

母さんの善言は最も心が温まる

葉美娥／訳 64

【證嚴法師のお諭し】

警戒心を高めてもパニックにならず、
真心で平安を祈ろう

慈願／訳 73

【大地の守護者】

お婆ちゃんブラウスを着て
リサイクル活動する

江愛寶&明陞／訳 78

【不老の秘訣】

黙々と仕事をする幸せ〜程廖邁さん

常樸／訳 93

【行脚の軌跡】

世を震撼させる災難は
人を目覚めさせる警鐘

済運／訳 100

慈濟大記事【四月】

済運／訳 106

心の防疫

「外部からのウイルスは生命体に寄生すると増殖します。心の煩惱は愚念に取り憑かれて生じます。ウイルスが病を引き起こすのを避けるには、防疫に協力してその蔓延を途絶しなければなりません。人の煩惱をなくすには、愚念を無くして清浄な心に戻さなければなりません」。十七年前サーズ（SARS）の感染が世界を震撼させた。台湾の民衆も生命を脅かされる恐怖に陥っていた中で、證嚴法師はこのように呼びかけた。

二〇一九年の年末、WHOは新型コロナウイルスによる感染症（COVID-19）を国際公共衛生緊急事件に加えた。たとえ医療科学技術がどんなに進歩し、人々の公共衛生に対する知識が増えても、頻繁な移動が世

界規模となり、抗生物質の濫用が増して人から人への感染に対する警戒が疎かになると、その全てが感染の拡大を促すようになった。

今回の感染が最初に発生した中国では、既に八十以上の都市が封鎖された。工場は操業を停止し再開の見通しは立たず、世界の製造業の供給網は寸断され、経済や観光産業は大きな打撃を被っている。前世紀では天然痘など古来からの伝染病の根絶に大きな成果を上げたが、今世紀はサーズを皮切りに人類の新型ウイルスへの対抗が始まった。

発生源が不明で治療薬がない今この時、試練は医療科学技術の分野に留まらず、人と人の間でも信頼関係が試されていると言えるだろう。幾つかの国では中華系やアジア系の人が罵られたり差別されたりするケースが出ている。

サーズが流行した時に第一線で防疫に参与していた専門家の話によると、当時は民衆がパニック状態になり社会が混乱したことが感染に拍車をかけたのだそうだ。今、台湾の疫病能力は大きく躍進したが、民衆は今だに争って医療マスクを買い求め、本当に必要としている人たちに行き渡っていない。

台湾では政府が直ちに実名登録制を実施し、マスクの需給関係を調整し始めた。ネット上でも「マスクを譲る」運動を発起した人は少なくなく、また布マスクを手作りする人まで現れ、不織布マスクを医療人員や必要とする人たちに使ってもらおうとしている。

前期の特別報道に載っているが、最初に伝染病が発生した武漢では、社会に奉仕すべきだと分かっているが、何もできないという焦燥感が慈濟ボランティアに生じた。そして市の封鎖と隔離の下にネットによる読書会を開いて互いに励まし合い、仏法を聴いて心を落ち着かせた結果、人間性の美と善をも実証することができた。

例えば、隣近所で郷里に帰れない人たちの食糧を心配し合い、互いに関心を寄せてマスク二袋を届けた人もいれば、武漢で眼鏡チェーンストアを経営していた実業家ボランティアは、市が封鎖する前に故郷に戻り、自腹で防護ゴーグルなどの医療用物資を買い集め、第一線にいる医療スタッフに届けたのだそうだ。

ノーベル文学賞を獲得したフランスの作家カミュは長編小説『ペスト』の中で、「人類はもとより感染を恐れ、誰一人として免疫になる人はいない。ただ正直だけが人の心の疫病に対抗できる」と書いている。恐怖がもたらす根深い先入観と対立を防ぎ、絶望に対抗する時、「愛」を広めてこそ、人としての真の存在意義を現すことができる。(慈濟月刊六四〇期より)

共に伝染病に打ち勝つ

【主題報道】

新型コロナウイルスによる感染症には、まだワクチンも特効薬もない。悪い情報と偽情報が人心を乱し、目に見えない危機を作り出している。感染症が人の心に悪影響を与える前に、始めは無策でもやがて相互扶助するようになるまで、私たちは積極的に行動すべきである。

● 2月10日から台南の慈濟ボランティアは、要請を受けてマスクの製造工場に働いており、既に1カ月余りになる。(撮影・黄筱哲)

2019新型コロナウイルス感染症 (COVID-19)

2019年12月に中国で報告された原因不明の肺炎は、2020年2月、WHOによって正式に「COVID-19」と命名された。3月下旬の統計によると、感染症は180の国と地域に拡大し、世界の感染確認者は30万人を超えた。中国、イタリア、アメリカ、イラン、スペインなどが最も多い。



心を一つに疫病の終息を願う

全世界の慈済ボランティアが動き出した

訳・善耕

新型コロナウイルスの感染状況について

- ▼ 2019年12月上旬、中国武漢市で原因不明の肺炎が発生し、2020年1月7日に新型のウイルスが検出され、暫定的に2019-nCoVと名付けられた。その肺炎は「新型コロナウイルス肺炎」と呼ばれるようになった。2月11日、世界保健機関（WHO）は2019年の新型コロナウイルス感染症を正式に「COVID-19」と命名したことを発表した。
- ▼ 2月18日の時点で、30の国と地域の7万5千199人が感染し、2千9人が死亡した。中国本土での感染者は7万人を超え、死者は2千人余りに上り、患者の殆どが湖北省、広東省、河南省、浙江省に集中していた。

隔離対象に対する支援

- ▼ 台湾の衛生福利部（日本の厚生労働省にあたる）疾病管制署（疾病対策センター）の自宅隔離措置に従い、花蓮の慈済大学は香港とマカオから帰校した学生の対応にあたった。2月7日に学生寮一棟を隔離施設として用意し、看護スタッフは毎日積極的に電話で健康状態を聞くと共に、慈誠パパと懿徳ママも学生に関心を寄せ、落ち着いて過ごすよう語りかけた。食事は学校が三食を届けた。
- ▼ 政府のチャーター機で武漢からマレーシアに戻ったマレーシア市民ら合わせて百人以上

の人たちは2月3日に隔離キャンプで14日間の隔離経過観察に入った。国家災害管理庁（NADMA）の要請に基づき、慈済ボランティアはケア活動に参加すると共に、日用品と乾燥食品などの物資を提供した。

慈済アメリカ総支部は、アメリカ疾病予防管理センター（CDC）およびカリフォルニア州危機管理局（OES）の要請に基づき、武漢より帰国したアメリカ人の世話を担当し、軍の基地での隔離検疫期間中、通訳と生活用品の支援に協力した。慈済ボランティアは2月17日から大型クルーズ船ダイヤモンド・プリンセス号から帰還したアメリカ籍乗客に対するカウンセリングプログラムに参加した。主に隔離された人の恐怖心と不安を取り除いて心を落ち着かせるのが役目である。

●台北慈済病院の第一線医療スタッフは感染症予防に投入すると共に、疫病災害が早く終息するよう心から祈った。（撮影・范宇宏）



自国を守る

- 台湾の7つの慈済病院は防疫レベルを引き上げた。世界中の慈済志業グループは防疫体制をとり、各支部の出入口には非接触型赤外線額温計とアルコール消毒液が用意され、全員がお互いを守るように配慮した。リサイクルセンターでは消毒を実施した。
- 台南市白河区にある医療用品工場は、政府の要請でマスクの製造ラインを再開した。生産ラインは1日24時間、3交代で稼働し、機械技術者を除いて、品質検査から梱包まで全て軍が請け負っている。台南市経済開発局の支援要請に基づき、慈済ボランティアは2月10日より午前8時から午後4時まで生産部門に加わっている。
- 心の防疫を呼びかけるため、慈済基金会は2月1日から公式ウェブサイトに「證嚴法師の「今日の言葉」を載せている。慈済基金会は2月3日に「世界で幸せを祈る活動」を展開した。世界中の慈済人が各地の道場で毎日同じ時間に一斉に祈りを捧げ、疫病の災難を終息させるために菜食と齋戒を呼びかけたのである。
- 静思精舎は2月7日から、毎日『観世音菩薩普門品』ふもんほんを唱えることで人心の安定と疫病の終息を祈願している。

医療スタッフへの支援

- インドネシア、タイ、オーストラリア、アメリカ、中国、ロシア等の国の慈済人は現地でウィルス防護服、防護ゴーグル、手術用キャップ、メディカルキャップ、病床用シートなどの物資を調達し、感染の深刻な地域の病院に送った。
- 中国のボランティアは、最前線の医療スタッフを支援するために祝福の品や医療用品を寄付した。

(慈済月刊六〇期より)



●台北市の八德里サイクルセンターでは、ボランティアが朝の作業を始める前に回収した資源と作業場を丁寧に消毒した。

(撮影・廖慕南)



●マレーシアの実業家が寄付した医療用品は、クアラルンプールの慈済ボランティアがすぐに梱包にあたった。

(写真提供・慈済雪隆支部)



●福建省泉州市のボランティアは、泉州市第一病院と晉江市病院の医療スタッフに五穀粉、オートミール、シリアル、ビスケットなどの營養食品を届けた。

(撮影・黃國明)

マスクでケアする

文・李叔芸 訳・済運
撮影・黄筱哲

台湾は一月二十一日に初めて新型コロナウイルスによる感染症例が出現し、それに連れてマスクが品薄になった。緊迫した状況を緩和しようと、慈済ボランティアが動き出した。一貫した考え方は「必要とするところなら、どこでも出向く」である。

私

が台南白河のマスク工場に着いた時、空は真っ青に晴れていたが、周りには人影はなかった。工場に入ると内部規定に従って真っ白な防塵服と帽子を着ると、エアージャワーを浴びて外部から持ち込んだ塵を吹き飛ばしてから清潔な製造区域に入ることができた。

その区域内はかなり雑音で喧しく、機械が絶えず「ピーピーザーピーピー」という音を発して耳に付いた。ハイピッチの音は途切れることなく私の鼓膜を刺激

●マスク工場の従業員の指導の下、ボランティアは防塵服を着て、消毒した手で慎重にマスクのパック詰めを行っていた。





したが、働いている従業員や慈済ボランティアは気にする様子もなく、数時間にわたって防塵服と顔に密着したマスクを着け、テキパキとマスクの品質検査やパック詰めを行っていた。

感染拡大の予防として、政府は一月三十一日から数回に分けて台湾全土の六十六の工場を徴用し、二十四時間体制で生産し、軍隊が「防疫を作戰と見なし」、全力で支援した。台南市白河区にあるこの工場も政府に徴用され、製造ラインを増設して昼夜を問わず稼働している。慈済ボランティアも要請を受けて生産に加わり、二月十日から軍隊と工場の日程に

合わせて投入し、日々の生産量を達成している。

マスク製造に参加できるのは幸せ

「特に難しいことはありません。何か活動に参加できるだけで幸せです。だから行動すればいいのです」。こう言ったのは官田区から来た楊秋絨^{ヤシオウロ}さんである。今年六十八歳だが、かなり若く見え、以前、美容師だった時の話をしてくれた。今は主に家で孫の面倒を見ている。彼女は一九九五年、既に委員の認証を受け、今年二月上旬、マスク工場が人手を必要

としていると聞いて直ちに応募した。

しかし当時、どこで、何をすることか分からず、人手を必要としていることだけ聞いて、「私ならできます。要請されれば直ぐに行きます。社会に奉仕したいという思いだけです」。

楊さんは笑顔で今やっている仕事を紹介してくれた。実は簡単な仕事で、マスクの品質を検査してパック詰めするだけである。機械の操作など専門作業は工場の従業員が行い、皆、持ち場は決まっている。ボランティアは交代で作業に参加

●台南白河のマスク工場は従業員と軍隊が主力で、ボランティアは日中の生産に参加している。皆テキパキと品質検査をしていた。

し、すぐ慣れてくれる。毎日違った人が来るため、このような技術を求められない仕事割り当てられるが、彼らはそれを厭わない。

同じ動作を一日中やっているが、彼女はとても楽しいそうだ。というのも、これまでの人生では工場で働いたことがなく、真新しい経験だと思う一方、思っていたよりも面白いのだ。彼女はちよっと手を止めて頷きながら言った。

「本当にこんな機会でもない限り、こうやって工場で手伝うことなどなかったでしょうから、この縁を大切にしたいのです。人助けができる能力があるということ

とは嬉しいことです」。

彼女の精神を見て、私は台湾各地の裁縫手芸をしている慈済チームと住民ボランティアのことを思い出した。彼女たちも今回の感染症のために頑張っているのだ。彼女たちはマスクが手に入らない台湾の現状で、静思精舎の中でも裁縫が得意な徳佩師父トクペイと相談して設計し、布製のマスクとカバーを作り出した。特にそのマスクカバーは中に医療用マスクを入れることでマスクの使用時間を延ばすことができ、感染症予防物資の節約になると同時に、重複して洗うことができるため、環境にも優しいのである。

大衆を利することだけを考える

台南善化手芸工房でマスクの裁縫を教えているのは六十歳の蔡月麗ツァイユエリさんである。彼女はさっぱりとした気性で、裁縫が趣味である。十二年前に同じ趣味を持つ仲間と手芸工房を立ち上げた年長ボランティアだ。

蔡さんはシャッター製造会社の社長夫

人だったが、会社に行かなくなってから殆どの時間を工房で教えている。以前のことを振り返ると、毎日午後四時に会社に顔を出すのが、他の時間はショッピングや友人とお茶を飲んでいた。しかし今、工房に時間を割くようになってから少しずつ自分の心の持ち様を調整するようになった。

「環境は人を変えます。このかた自分

【布製のマスクカバーとマスクを作る必要性】

- ・ 医療用マスク不足の予防。第一線の医療人員に安全且つ十分な防護物資を与える。
- ・ 医療の必要がある人や病気の人に医療用マスクを十分使用してもらおう。
- ・ マスクカバーに医療用マスクを入れて使うことで使用時間を延ばすことができる。
- ・ 一時的なマスク不足を解消してパニックを回避する。
- ・ 何度も洗って使用することができ、医療用ゴミを減らすことができる。

がここに入りにするようになり、ましてや人にものを教えるとは、人生で思ってもいませんでした」。

手芸工房でボランティアするのはとても良い時間の使い方だが、それは一歩ずつ縁に沿って歩んできたのだという。マスク作りのように難しいことではないにしても細心の注意を払う必要がある。

彼女は、人に教えるという責任は思った以上に重大で、もしいい加減に間違ったことを教えれば、全員が間違ったまま

●善化区の手芸工房で、蔡さんはミシンの前に座り、ボランティアに布製マスクの裁縫手順を説明した。皆、感染症に少しでも役立とうと、労力やミシンの貸し出しを申し出た。

になつてしまつと考へている。

「私は先生ではなく、中心になつてやっているだけです」とマスクの見本を取り出しながら説明してくれた。工房の人たちは本当に裁縫が上手である。「互いに助けたり学んだりして同じ方法で仕事しているだけで、そうすれば同じ品質のものできるのです」。

工房に来るボランティアの多くは既に裁縫関連の仕事はしていないが、技能だけは残っており、ちよつと練習すればいいそうだ。法師が常々言っている「行動する中で学び、学ぶ中で目覚める」というのはこのことだと彼女は言った。



「今、人生で一番楽しいのは人と分かち合うことと学ぶことです。この世には私たちよりも苦しい人がいっぱいいます。考え過ぎず、人生に価値を持たせるべきで、そうしてこそ、年を取った時に喪失感を味わうことはないのです」。

自分に適した仕事を見つけ、
心込めて行う

新北市三重区の手芸工房には中国江蘇省無錫市から来た七十歳になる賴瑞ライルイ徵ジヨンさんがいる。彼女は春節前、花蓮で慈濟榮譽董事の認証を受けた後、證嚴法師

と共に正月を過ごしたことがないため、静思精舎に十日ほど滞在することにした。彼女は精舎のために何かしようと思いい、尼僧たちの掃除や畑仕事を手伝った。初め、彼女は手袋をはめずに畑仕事したため、両手がブヨに噛まれて饅頭のように腫れ上がったことを思い出して笑った。

「初めは二月七日まで滞在し、九日に中国に帰る予定でしたが、運悪く新型コロナウイルスの感染が拡大して故郷の家族から帰らない方が良くと言われたので、台湾に残ることにしたのです」。ボランティアがマスク作りを呼びかけているのを聞いて、彼

女は裁縫は苦手だったが、他にも仕事があるだろうと思って参加することにした。二月十日から彼女は殆ど毎日、台北市三重区の慈済センターに行き、不合格マスクの解体作業の責任者として仕事をした。初めのうちは昼間から延長して夜の八時に帰っていたが、三月に入ってから生産量が安定し始めたので、早く帰れるようになったそうだ。

彼女によると、布製マスクを作るには細心の注意が必要で、ミシンを扱う人も大変だが、解体する人は一針ずつの作業がもつと細かく、布を傷つけないようにしなければならぬ。初めは彼女もイラ

イラしていたが、仕事しながら證嚴法師の開示を聞き、法師がいつも口にしていう「心して」という言葉を思い出すと、次第に自分の仕事をやり通すことができようになり、楽しくなった。

また、中国の家族とは海峡を挟んだ兩岸に分かれているが、距離はあまり感

じない。というのも、每晚八時にオンライン読書会で会っているからだ。そして、法師の「きっちり仕事するのは功名のためでも功德を得るためでもなく、自分の本分と違って、誠意のある無私の心で奉仕すべきです」という話に言及した。それは心して物事を行い、感じ取り、慈悲

【誰が布製マスクカバーとマスクを作るのか】

・ 2月初めから台湾全土の慈済拠点でボランティアたちが生産を始め、会員に配っている。各地の手芸工房にはミシン類や熟練した人たちが揃っているが、そこにアパレル関連の業者がミシンの貸し出しを行なって職人も参加している。2月10日から3月15日までに全台湾で延べ9千数百人が投入し、8万7千枚あまりのマスクが生産された。

・ 製造工程は設計、裁断、生地アイロン掛け、ミシンによる縫製、品質管理、製品のアイロン掛けなどに分けられ、ボランティアたちが流れ作業で行ない、長期間の使用に耐えられるよう品質を重視すると共に、人心の安定に役立つよう願った。



●大愛感恩科技公司提供した防水生地を使って、手芸工房は丁寧に紺色の裏地と白色の表地のマスクを作っている。

喜捨の心で奉仕し、行動することである。新型コロナウイルスの感染症はまだ特效薬がなく、マスクを買うために薬局の前で並ぶ人々の長い行列が毎日のように見かけられる。台湾全土の慈濟ボランティアが心を一つに力を合わせて「布製マスク」を作ることで、医療用マスクを第一線の医療人員や医療を必要としている人に使ってもらうことは、それを必要としている人と争って買わずに済み、社会の負担を減らすことになるのだ。一人でも多くの人がマスクを譲れば、それだけ感染のリスクが減るのである。

(慈濟月刊六四一期より)

日本支部 菜食に共鳴し、手作りマスクを贈ろう

日本支部では「菜食に共鳴し、手作りマスクを贈ろう」と題した活動を始めた。最も必要な時期にマスクやマスクカバー作りを呼びかけることで、地域住民に思いやりと愛を広げている。

(撮影・河村吉美)

手作りマスクとマスクカバーの作成

マスクの作成を決めた後、元々裁縫師だった劉月英師姐リウユエインスージーと河村師姐は、先ず生地屋に行つてマスクの生地を探したが、選ぶだけで二時間余りも掛かった。その後、布施恵師姐フーシューイと山田智里師姐が、良のマスク作りの方法を討論した。





(写真の提供・布施恵)



劉月英師姐：目も疲れますが、本当に楽しいのです。
(撮影・徐嘉徳)

布施恵さんは普段、夫の病院経営にも関わっているが、マスク作りのために早朝から夜までミシンで裁縫し続けた。「主人が一切の家事を引き受けてくれたことに感謝しています。意外にも小さなマスク一つで裁断、切り取り、アイロン掛け、縫製など少なくとも一時間半は掛かるのです。手間は掛かっても、それを使う人が安心して喜ぶのを想像するだけで、自分も内心喜びが湧いてくるのです」と笑顔で言った。



ご提案：
外出先から帰宅してマスクを外した後、窓際に置いて日光に晒せば、殺菌作用があるのと同時にマスクを温めることができます。



(撮影・布施恵)

中国湖南省長沙市にて最前線への支援

医療を護る衣服を届ける

武漢に隣接する湖南省長沙市で新型コロナウイルスの感染者のケアをする医療関係者は、任務を含めて前後四十日間隔離され、毎日ハードな仕事量をこなしつつづけている。長沙市の慈濟ボランティアは五時間のうちに二百着の衣服を集め、第一線で治療にあたる医療関係者の着替えとして提供し、支援の気持ちを伝えた。

文・潘静、胡淑霞、唐建雲（中国湖北省武漢の慈濟ボランティア） 訳・有田夏子

湖

南省の各地において、新型コロナウイルスの感染が確認された患者は千人を超えた。長沙市の第一病院は省と市の感染症指定医療機関であり、もと

もこの病院で働く医療スタッフの他にも、各地の病院から志願して選ばれた精鋭たちがここに派遣されて医療に当たっている。

長沙市の中心病院から派遣された医療スタッフ達は毎日の退勤後、病院の近くに政府が臨時で借り上げたホテルに集合することになっている。食事は簡素で少なく、午前中に卵を一個、饅頭^{マントウ}を半分、粥をお椀に半分だけのこともある。食べ物不足しているわけではなく、仕事中にトイレに行くことができないため、あえて少量しか食べないのである。防護物資はきわめて不足しており、特に防護服は貴重品である。一度着ると勤務中は脱ぐことができない。着替えるのも惜しく、またそもそも着替えがないことも多いのだ。そのため、大人用紙おむつで用を済ませる人もいる。

一組の医療スタッフは基本的に連続十五日間の任務につかなくてはならない。任務開始前に十五日間の隔離観察期間があり、任務終了後にもホテル内に待機して十五日間の隔離観察期間がおかれる。このように前後含めて四十日余の隔離を経て、感染していないことが完全に確認されなければ自宅へ戻ることができない。退勤後は自主隔離洗濯もままならず、汚染を恐れる

長沙市中心病院の李^{リー}甜^{ティエン}さんは家を出るときに数着の着替えしか持ってこなかったが、任務開始後にこれでは足りな



いことに気がついた。毎日の仕事量は膨大で、洗濯をする時間などない。たとえ洗ったとしても、大勢が集中して寝泊りするホテルでは窓を開けることが許されないため、換気することも服を干すこともできない。また、病院内で着用した衣服を持ちこむことでホテルが汚染され、相互感染を引き起こすことも心配だった。

二月三日午前中、李さんは同僚のSNグループにメッセージを発して、二百着の衣服を届けて欲しいと訴えた。退勤時の着替え用とするため、午後三時過ぎに長沙市中心病院で待つ同僚に手渡してほしいと助けを求めたのである。

同じSNグループの胡淑霞フーシューシャさんは長沙市中心病院の医師で同僚でもあり、また慈済のボランティアでもある。彼女が直ぐにメッセージを慈済ボランティアのSNグループに転送すると、それを見たボランティア達が次々に呼応し、必要に応じた衣服を急いで整理しはじめた。

一人一人がバスに乗って病院に届けようとするれば、途上で感染する恐れがあるため、ボランティアの潘静パンジンさんは、車を運転して衣服を回収する役割を自ら買って出た。疫病が蔓延する非常事態であるため、地区ごとに外部の車両や人員の進入が規制されていた。メンバー達は準備した衣服をそれぞれの地区の入口まで持

ち寄り、潘さんに手渡すことにした。

ボランティアの馬萍マーピンさんは直ちに彼女自身、息子、夫のものをあわせて二十着の衣服を用意した。下着や靴下の多くは新品だった。彼女が衣服を整理していると、そばにいた夫が「送るならば、一番いいものを送りなさい」と繰り返し論じた。

馬さん一家から衣服を受け取ると、潘さんは王滔ワンタオさん、曾小紅ソンシャオホンさんの住む地区の入口へと向かった。ボランティアの陳青チェンチンさん、馬莎マーシャさん、劉怒濤リウヌタオさんは潘さんの時間を無駄にしないようにと、

●中国湖南省長沙市の慈済ボランティアは、疫病と第一線で戦う医療関係者に着替え用の衣服を送り届け、彼らを応援した。(写真提供・唐建雲)

早々に家で梱包をすませて道路脇で待っていた。姜珂さんは潘さんが昼食を食べていないことを知ると、衣服を手渡す前に彼女を自宅に招き入れ、餃子をゆでてふるまった。

各地から届いた愛

医療スタッフの感動と喜び

車はすぐに受け取った衣服で一杯になった。潘さんが長沙市中心病院に到着したのは三時前だったが、胡さんはすでに入口で待っていた。胡淑霞さんが点検中に男性用の上着が一着足りないことに気づくと、潘さんはすぐに近くの友人に

電話をかけて協力を求め、ついに必要な衣服が全て揃った。

この時、北部で回収した衣服を乗せた李春彦さん、そして各地域から衣服を運んできた易宇さん、廖群さん、洪菁霞さんらボランティア達も次々と到着した。洪さんはなんと河西からタクシーに乗って来たという。彼女は二十数着の服を持参したが、自分が着るために残したのは数着だけだった。

こうして五時間のうちに二百着余りの衣服を集め、胡さんの同僚である看護師長の姚美容さんの車に積み込んだ。姚看護師長は感動して、「短時間のうちにこれほど多くの良質な衣服を送り届けてく

ださい、本当に感謝しています」とお礼を言った。ボランティア達は姚看護師長に対し、どうか自分を守るようにと繰り返し告げ、また慈済人から医療関係者への祝福を伝えた。

午後五時を過ぎたころ、胡さんが李さんと李翔人さんから受け取ったSN

Sメッセージには、衣服を無事に受け取ったこと、「感謝、感動、幸福」の気持ち、そして慈済の愛を皆に伝えていくと書かれていた。このメッセージを見た慈済ボランティアも喜び、又感動し、第一線で奮闘する医療関係者と患者達に心からの祝福を送った。(慈済月刊六四〇期より)

武漢と共に難関を乗り越える

鍵暉さんが献金した百人民元(約千五百円)は武漢への感謝の気持ち

心臓移植手術をしてくれた医師と慈済人の付き添いに感謝した。

今この時に彼らが思うのは、ただ武漢と難関を共に乗り越えたいということだけだ。

私

は武漢で生まれ育った人間です。

退職する前は紡績工場の工員として働いていました。その後、印刷店を経営しました。暇な時間にトランプや麻雀をして人生を無駄に過ごしたくないと思っていた時、知りあいを通して慈濟という団体に出会いました。読書会に参加し、ボランティアの研修を経て二〇一六年に慈濟委員の認証を受けました。

武漢のボランティアは殆どが勤め人で、退職した私は時間があるため、平日の訪問ケアにはいつも積極的に参加しました。

二〇一九年十月末に、ケア対象者の鍵

暉さんが武漢の協和病院で心臓移植の手術を受けるために福建から転院してきたので、私たちが付き添うことになりました。彼はとても幸運で、武漢に到着するや否やドナーに恵まれました。

二〇二〇年一月十九日、鍵暉さんが退院して福建に戻るといっているので、私と数人のボランティアは漢口駅へ見送りにいきました。私たちは鍵暉さんの手術後も入院していた間は見舞いや生活支援金を届けに行きましたが、いつもマスクを着用しました。あの日、漢口駅はいつものように大きな荷物を抱えた帰省客や旅行者たちで賑わっていました。

武漢の気候は寒く、福建よりも十度以上低かったです。手術後の鍵暉さんは体力がありませんでした。新型コロナウイルスの感染が益々拡大する中、私は絶対に風邪を引かせてはならないと思い、娘が着なくなった黒のダウンジャケットがあつたので彼に持って来たら、意外にもサイズが合っていました。彼は嬉しそうにそのジャケットを着て、新年を迎える前に故郷へ帰りました。兄弟姉妹が多い我が家の大晦日の夜はいつもホテルで賑やかに食事をして年を越すので、今年もテーブルを二つ予約しました。

しかし、武漢は一月二十三日から封鎖

されました。福建に戻った鍵暉さんとお母さんは故郷で自宅待機し、私に無事を知らせると共に武漢に寄付したいというメッセージを送って来ました。彼は大手術を済ませたばかりで、お父さんは精神疾患があり、お母さんは清掃婦で収入は多くありません。それでも彼女らは武漢が難関を乗り越えられるよう支援したいと言いました。

「武漢の医師をはじめ、慈濟の人たちや家主さんまでみんな親切で、どうしても感謝したいとお母さんが言っています」と言うメッセージが届きました。そこで私は彼に、「愛の心で以て寄付するのが

大切に、金額ではありませんよ」と言う
と、お母さんは百人民元（約千五百円）
を寄付してくれました。

大晦日の家族晩餐会はキャンセルにな
り、親戚たちは理解してくれ、ホテルも
返金に同意してくれました。返金手続き
で行列ができたのは初めての経験でし
た。感染は益々拡大し、私はどこにも出
かけないようにしました。ボランティア
をしたかったのですが、年齢的に認めら
れず、防護服もない状態でした。今回の
新型コロナウイルスに感染して亡くなっ
た人の大半が高齢者なのです。

夫は毎日相変わらず、自転車です十分ほ
どの所にいる寝たきりの父親の世話に出

かけていました。そして、親戚たちが危
険を冒して出かけなくても済むように、
食糧を買って順番に届けていました。

夫はスマホでがらんとした今の武漢の
街や道路の様子を記録し続けていまし
た。モノレール一号線と地下鉄二号線が
通る普段はにぎやかな「循礼門」の近く
には、武漢協和病院や大型スーパーの
チェーン店、フラワーマーケット、江漢
路歩行者天国などがあり、本来ならお正
月で大いにぎわう所ですが、今はタク
シー一台と電気自動車一台が走っている
だけでした。

都市が封鎖された後、武漢市にある
六千台のタクシーは政府に徴用され、各

コミュニティの委員会が配車して、行
動の不自由な住民に薬や食料品などの配
達を行なっています。スーパーは通常通
り営業して市民生活を支えています。配
達員も今ではお金のために働いている
のではなく、多くの市民は彼らの配達に
頼っていることを自覚しているのです。

慈済ボランティアは人のために何かし
たいと思っても、外出が禁止されている
ため、焦りを感じていました。武漢のボ
ランティアたちは、政府の言う通りに自
分の身を守るからこそが感染拡大を抑え
る最高の手助けである、とウィーチャッ
トで呼びかけました。

私はボランティアたちにオンラインで

の読書会を提案したところ、皆、賛同し
てくれました。初め参加したのは七、八
人でしたが、それでも楽しく、心はとて
も静かで落ち着き、時間はあつという間
に過ぎました。本の内容もその時の気持
ちや状況にぴったりでした。

読書会に参加する人が徐々に増え、年
配のボランティアも参加して「耳で聞い
て」理解していました。そういう時、私
は正信と正念を持ち、ネガティブなニュー
スに惑わされず、ポジティブなエネルギー
を広めることができました。慈済的な
深い考え方ができるようになったことに
感謝しています。

（慈済月刊六四〇期より）

貴重な「原種」が農民を元気づけた

◎文・陳麗安 撮影・黄筱哲 訳・善耕

殆どのラオス農民は良質の種もみを買う余裕はない。植え付けの時によく異なる品種が混ざるため、かえって収穫の質と量が低下する。慈済が贈った種もみは「原種」から栽培されており、稲作の生存率を向上させることができる。農民はその心遣いを大切にし、気候が不順な年でも水田が異なった姿を見せてくれることに期待している。

灼

熱の太陽の下で曲がりくねった田んぼの小道を進む一行は、真つ赤な農業用車輻に揺られていた。両脇の田んぼでは数頭の牛がのんびりと乾いたわらを食べていた。本来なら黄金色に実った稲穂が垂れ、刈り取りを待っているはずなのだが、見渡す限りひび割れ

た田んぼだった。

チャンパサック省パックセ市農業庁の米加工工場で工場長のボウザバさんが田んぼの傍の木に残っていた水の跡を指して、三カ月前の八月末の水害でサナソンボウン県にあるこの村の水位が上昇し、メートル近くになったことを説明した。

今回、慈済の配付地点に来て分かったのは、異なる地域の村でも田んぼの被害の深刻さはほぼ同じだという事だ。住民の生活は以前の静けさに戻ったが、家の壁にはかすかに水の跡が残っているのが分かった。通り過ぎて来た田んぼは百日が経っても依然として生氣がなかった。

乾季はもつと乾燥し、豪雨はより激しくなっている。

ラオスは国土の八十パーセントが山と丘陵であり、北東から南西に向かって傾斜している。メコン川流域に沿って南部

に下ると肥沃な平原に至る。そこはラオスの主要な農業地帯で、サワナケート省とチャンパーサック省が位置し、ラオスで二つしかない農業庁もそこにある。特に、サワナケート省は国の重要な米の生産地の一つで、年に二回収穫でき、米の品質は非常に良い。

ラオスの主な商品作物は「もち米」で、庶民の日々の食事を見ると分かる。調理方法は大同小異だが、異なる調味料を使用するので味にバリエーションがある。

ラオスの民家は竹の筒にもち米を入れ、ココナッツの粉または砂糖を加えて甘くする。これは地元の一般的なデザート



トであるが、時々屋台でも見かける。また、もち米を水に一時間浸し、柔らかくしてから二十分間蒸すとあっさりとした朝食ができあがる。ほかに、もち米を小さく丸めて油で表面がサクサクになるまで炒めてから醤油ま

●慈済はラオスで評判の良いタサノ11号という品種を選んで農家に届けた。一粒一粒が大きく育った高品質の「原種」種籾である。

たは特製ソースにつける食べ方がある。

ラオスでは主に二期作が行われ、一期目は五月から六月までの雨期の初めに種籾を撒き、十一月から十二月にかけて収穫する。二期目は十二月から田を耕し始め、三月から四月にかけて稲刈りする。ちなみに耕作の順序は整地、育苗、田植え、そして刈り取りである。

農業庁に十四年間勤務していたボウザバさんは大学で農学を専攻し、卒業後に農業庁に入った。長い間種籾を扱ってきた彼は、今回の水害のもたらした影響を語りながらその眼差しにむなしさにじませた。

「近年の雨季は降雨時間と降雨量が不安定で、時には何日も大雨が降り続いたかと思うと全く降らないこともありま

す」。以前は五月から十月までが雨季で、十一月から翌年の四月までが乾季だった。近年は世界的な異常気象の影響で、降雨量の変動が明らかに大きくなっている。しかも二〇一九年の収穫前は、残念ながら熱帯サイクロンと低気圧による豪雨が水害をもたらし、米を順調に収穫することができなかった。

水に浸かった籾殻は動物の餌にした

り、焼いて肥料にする。田んぼの土は掘り起こしてから約一週間日光にさらし、

下の土壌を殺菌すれば植え付けを続けることができる。ただし、殆どの人は雨季の自然の降水に頼って、年に一回の植え付け方法を採用している。

ボウザバさんによると、政府は一部の地域で水路を建設しているが、それを利用するには、一期ごとに一ヘクタールあたりの水道料金と電気料金を納めなければならぬ。乾季に稲を植えれば、雨季よりも害虫の発生が少なく、自分で水の量を制御することで、より豊かで優れた品質にすることはできるが、殆どの農民は高い水路使用料を払う余裕がないため、乾季が到来するとやはり、家計を

支えるために出稼ぎの仕事をするしかないのだ。

ラオス人の平均月給は百万から百五十万キープ（約一万三千から一万九千円）であり、田舎に行くほど少なくなる。近年、各種国内建設に伴い、物価は年々上昇しているが、給与だけが上っていない。二〇一九年は洪水のためにもち米の供給が減少したため、市場価格はそれに伴って上昇した。以前は一キロあたりわずか千七百から千九百キープ（約二十円）だったが、災害後、三千五百から四千キープと倍以上に値上がりし、被災者にとって弱り目に祟り目であった。

四十一年前の悪夢の再現

被害が大きかったサワナケート省の田舎では水害が過ぎ去ったあと依然、混乱していた。農民の悲しみや恐怖、怒りは、無念さと将来に対する不確実さが取って代った。

ソナボーリ県バンヴカ寺院近くに住んでいたラップさんは、洪水の日、急速に水嵩が増えてくる状況がありありと目に浮かぶという。特に、ラップさんの十歳の孫娘ナットちゃんは大人たちの「洪水」と言う言葉を聞くと、怯えた目をする。

「これほど深刻な水害は一九七八年以

来で、その時私は十三歳でした」とラップさんは言った。当時の水嵩は約二メートルで、政府は片田舎に救援の船を派遣して、孤立した人々を避難所に連れて行った。四十一年後、再びこのような深刻な洪水が発生し、小さな子供たちにとっては最初の経験となった。ラップさんにとっては悪夢のような思い出が呼び覚まされた。

今回は同居していた兄と妹、そして五歳と十歳の孫を連れて山に逃げたため、洪水から難を逃れた。

「山から降りて来た後、田んぼが水浸しになっているのを見て、怒りがこみ

上げてくるのと同時に悲しくなりました」。家の側にあるバスケットコート二十面ほどの広さの荒れた田んぼは全てラップさん家族の土地である。乾季の種まきが近づき、ここで地下水を汲み上げることができても、灌漑するのに十分な量はない。そして政府もまだこの地域に用水路を建設していない。ラップさんは雨季に種まきをしたいと考えていたので、慈済から高品質の種籾を受け取ったことで、「来年は豊作になりますように！」と期待に胸を膨らませていた。

彼女は、「原種」から育った種籾がどれほど貴重で強いかを知っているのです、今後も続くであろう不順な天候に直面した時、今の水田から思いがけない光景が現れるかもしれないと期待している。

原始的な農耕に改善の余地

慈済は被災者一世帯あたり二十キロの白米と三食の調理に必要な油、塩、砂糖を提供した。種まき用の種籾を選択する際に、慈済は特別に台湾の米専門家の洪再生^{ホンサイション}氏をラオスに招いて支援してもらった。

何度もラオスを往復して現地市場と稲田の実地調査を経て、気候の影響とインフラの未整備のため、多くの農民が年に一度しか収穫を得ていないことを知った。「ラオスの農業の現状はまるで三、四十年前の台湾のようです。環境

●ラオスは米が主食で、米屋にはニーズに合わせたさまざまな米が揃っている。ここでは竹筒もち米ご飯がよく見かけられる調理法で、煎餅のような「カオ・フ・サ」は農家が副業として出す屋台で売られるおやつである。人々は供養としてご飯に野菜とソースを載せたものを僧侶に捧げるが、ご飯は余れば、民衆が持ち帰ることができる。





●米の加工工場で慈済が購入した種籾を手作業と機械で不純物を除去し（左下）、連日の梱包（上）を経てやっと被災地に届けることができる。農民は配付地点で慈済からの通知書に受付の印（右下）を押してもらった後、白米と種籾を受け取る事ができる。

面、技術面または管理面において改善の余地が多く残っています。しかし、ラオスの土壌自体は確かに良い米を生産することができると述べています。

現地の種籾の販売業者、農業庁、および種籾センターなどの専門家と討論した結果、最終的に慈済はラオスで非常に人気のあるタサノ十一号という品種を配付用の種籾に選んだ。もち米は白米のように外観の透明度で良し悪しを判断することはできず、形で見分けるしかない。タサノ十一号の種籾の形は丸くて大きく、住民に希望に満ちた活力をもたらすことが期待出来る。

ラオスの殆どの農家は良質の種籾を購入するのに十分な貯金を持っていない。さらに植え付けの際にさまざまな品種が混ざり合い、最終的に種籾の遺伝子が混ざってしまい、かえって生存率と品質を落としてしまっている。

今回配付された種籾の特色は「原種」から栽培されたことである。洪氏は次のように語った。原種は国際種子検査協会（ISTA）の定める検査規程「三段階増殖体系（原原種↓原種↓採種）」により検出された水稻の優れた品種だけが持つ遺伝的特性を備えている点で、成長しからの品質と生存率が相対的に高い。



● 慈済は油、塩、砂糖を配付すると同時に、サワナケート省とチャンパーサック省の農業庁も慈済と歩調を合わせて、大至急種籾の蓄えを開始した。チャンパーサック省にある農業庁 米加工工場の工場長を務めるボウザバさんは、連日労働者を引率して選別と梱包作業を行った。「これら高品質の種籾は生存率が九十五パーセントに達するので、本当

に被災者を助けることができると信じています」と自信を持って言った。

加工工場では、作業員が先ず手作業で予備選別を行い、次に機械に入れてわらや枯れ枝などの不純物を取り除き、その後、脱穀機に通してから一袋二十キロに包装する。最後にそれぞれ配付地域に合わせた数量を発送する。

被害調査、準備、種籾の選別から大量の種籾を保管している大きな倉庫でそれを見つけること等、あらゆる作業で困難が待ち受けており、それが一つ一つ乗り越えて、やつと種籾を農民の手に届ける

ことができるのである。この種籾は愛と善意を織り交ぜて生まれた品種だと言える。「善の種」は豊かに実った稲穂をもたらし、農民に明るい笑顔を取り戻してくれるだろう。

（慈済月刊六三八期より）
（続く）

● 洪水が猛威を振った後、稲は枯れてしまい、被災農民は窮地に陥った。慈済の配付した高品質の種籾は収穫を増やし、被災者を悲しみの淵から這い上げさせるだろう。

世代をつなぐ

学びの絆

「慈濟いそく懿徳会」は、三十年前の学校においては斬新な試みだった。慈濟ボランティアは生徒たちに寄り添う中で、囃らずも自分自身の子供との関わり方を見つめ直すことになった。

生徒たちは親のような役割を果たす慈誠パパや懿徳ママとの交流を通じて、大人との付き合い方を学ぶことができた。表面的には、子供が一方的に助けられているように見える関係だが、実際には二つの世代がそれぞれに学びを得たのだ。



「自分の子供すらまともに育てられな
自いのに、人様の子供をどうやって

教えるというの？」二十年前のこと、訪
れた慈済看護学校の生徒を見た潘廖
葉さんの姑は、心に浮かんだ不安が口を

ついて出た。

張り詰めた嫁姑関係とバランスを失つ
た親子関係に覆われた家庭で、潘さんは
嫁として素直になれず、母親としても心
が折れていた。慈済に入った後も家庭間

●懿徳母姉いとくぼし会が創立された
当初、ボランティア達は毎
月花蓮で子供たちと会う前
に證嚴法師との座談会に出
席し、教育理念を吸収した。

(写真提供・花蓮本部)

題を解決する方法を
学んでいるところだっ
た。「懿徳ママ」になっ
た他のボランティアた
ちと同じく「どうすれ
ば、他人の子供を導く
ことができるのだから」
と不安になった。
血を分けた子供ですら
まともに育てられず、
学歴も高いわけではな
い自分に、教育ボラン
ティアなど本当に務ま
るのだろうか？



自ら反省し、 品格のある子供を育てる

慈済看護専門学校は一九八九年に創設され、その一カ月後に三十六名の慈済委員からなる懿徳母姉会が編成された。證嚴法師は、「懿徳」は母親として持つべき品格であること、我々は気品と尊嚴の模範を示し、子供たちを「甘やかす」のではなく「愛する」べきであること、そして人生における自分の役割を果たすためには人としての基本的な道理を身につけるべきことなどを、丁寧に教えてくださった。

「證嚴法師は、髪をきちんと梳かし、朝は快活であるようにとおっしゃいました」ボランティアの潘さんと林雪珠^{リンシュエジュ}さんは、偶然にも同じことを口にした。毎月の懿徳日の活動の前には證嚴法師との座談会が開かれたが、法師の本質的な教えは責任感を持つこと、そして品格のある子供を育てるには自分自身がまず品格を持つべきであるという。

林さんは夫と共にプラスチック工場を経営していた。事業は成功し、子供たちの教育や学業成績は自然に任せていた。だが人様の子供を預かるとなると心配になった。「懿徳の子供とは毎月二時間交

流するだけ。彼らは私のことなど相手にするだろうか？まして『母親』として認めてくれることがあるのだろうか？」

看護学校の生徒たちにとって、懿徳ママは不請の他人である。どうすれば他人という隔たりを乗り越え、家族に近い関係を築くことができるのか？「中途半端ではよくない。責任をもって取り組みなくては！」彼女は重く受け止めた。

だが思いとは裏腹に因縁に従わざるをえない時もある。ある時、彼女は懿徳の子供が単位を落としたことを知った。夏期講習の費用は一学期間の学費よりも高く、この子供の家庭環境にとっては重い

負担であることが明白だった。そこで住所をたよりに花蓮の山村にある子供の実家を訪ねたが、おそらく長い貧困によるものだろう、「両親は子供の学習状況をどうすることもできず、「彼女が勉強しないのなら、どうしようもない」とだけ言った。対話は望ましい結果を得られず、彼女は黙ってその子の実家を後にした。

彼女はかつて、心からの努力が徒労に終わっていると感じることもあったが、「責任をもって取り組む」という決心を忘れることはなかった。自らが品格を保ち続けられれば、いつかその姿勢が子供の身にも反映される時がくると信じていた。

彼らはボランティアで培った経験を生かし、懿徳日のほかにも自費で出かけ、都合を合わせると懿徳の子供を連れて貧しい人々を訪問したり、医療ボランティアを体験させ、これから進むべき分野に早くから接して病気と苦しみを知ることができるようにした。ある時、訪問の帰り道に台湾東部北端の海岸にある野柳地質公園に立ち寄ると、子供たちは女王の頭の形をした奇石の前で記念撮影をした。潘さんは、まるで雀の群れのように高い声をあげてはしゃぐ子供たちを眺め

●1990年代の慈済看護専門学校の卒業生たちは故郷に帰って懿徳母姉会を訪ね、静思精舎で一緒に餃子を作った。(写真提供・花蓮本部)

ていた。

時が経ち、あの子供たちはもう職場で立派に働いている。あの時ボランティアたちと共に貧困や病気の現場に入ったことが彼女たちの貴重な経験となり、将来の患者に対する深い関心と思いやりにつながったのである。

愛とは寄り添うこと 親として必要な修行

一九四〇年から五十年代に生まれた世

●懿徳ママは家庭訪問や保護者との対話を通じて子供の生活や学業の状況を理解し、子供達により深く寄り添えるようにと願った。



代は、台湾が物資の不足した貧しい時代から抜け出して経済的に飛躍する過程を経験している。家族構成は小さくなり、教育資源はより豊かになった。一つ前の世代に比べれば子供達への関心も高まったが、やるべきことは増えて忙しくなった。多くの女性は家庭と仕事の両立に奔走し、子供たちはかつてのように大家族の中で過ごし、近所の人たちに育てられることもなくなった。

彼ら働き盛りのボランテニアたちは使命感をもって懿徳ママの役割を引き受けたものの、自分たちは教育に対して確固た

る考えを持っていないことに気がついた。経済成長期の勤労世代であった彼らは、常に上を目指して努力してきた。かつての貧困からは抜け出したが、子女の教育については幼い頃に自分自身が受けた教育の記憶に頼ることが多かった。子供にとっても良い学歴と良い仕事を得ることが人生の成功への近道だと考えたのだ。

慈済看護専門学校の創立期には懿徳ママしかいなかったが、後に男子学生のために慈誠パパが仲間に加わった。慈誠パパを務めた林朝富^{リシチヤオフ}さんは、十五歳になった息子の家鴻^{ジヤホウ}がラップ音楽に夢中になっ

慈誠懿徳会

プロフィール

1989年に慈済看護専門学校が創立された時、ボランテニアたちが自身の子供に対する愛情をもって親から離れている学生たちに寄り添い、経験と智慧を次世代の若者に伝えてくれることを願って、懿徳母姉会が組織された。

1994年に慈済医学大学が創立されると、両校の制度改革によって学部が増設され、懿徳母姉会は慈誠隊ボランテニアも参加することになったため、名称を「慈誠懿徳会」、略称を「慈懿会」と改めた。現在は10〜12名の学生に対して教師1人、慈誠パパ1人と懿徳ママ2人が付き添う。

このような制度は30年前の学校においては斬新な試みであったが、最近流行しはじめた「世代間交流による相互学習」と本質は同じである。この制度は教育志業分野だけでなく、慈済の慈善、医療、人文という他の志業分野でも推進され、今では異なる世代が交流する過程で互いの専門性と経験を分かちあう、慈済の各志業の特色の一つとなっている。

(整理・陳麗安)

た時にそれを理解することができなかつた。彼は若い頃に台湾南部から北部に上京し、懸命に働いてきた。子供の人生計画は大学に入り、安定した仕事を得ることだと考えていた。だが子供がこの「安定したルール」から外れようとした時、怒りと驚きを感じるばかりで、一体どうすれば良いか分からなかった。

彼らが寄り添った懿徳の子供達も、自分たちの子供と同じく、社会の価値観が変化する時代に大人になる前段階としての思春期を迎え、その心の中では戦いや綱引きが行われていた。日本のユング心



理学者である河合隼雄はこれを「大人になることのむずかしさ」と表現した。彼らは生理的にも法律的にも立派な「大人」であるにもかかわらず、社会的及び心理的にはまだまだ未熟であり、その落差が現代人の苦しみを生み出しているという。

潘さんの息子は束縛を嫌い、全てに反抗することで自分が大人であることを証明しているように見えたが、兵役中に人間関係に挫折して生命を断とうとしたこともあった。彼女は證嚴法師の言葉を引用しながら、心を開いて何度も話し合った。すると息子は徐々に他人と関係を築く方法を自ら見つけ、その後も人生経験

を経ながら、理想的な大人への道を歩み出したのである。

家鴻と父親の関係を救ったのは、口数の少ない母親の林如金さん^{リンルイジン}であった。父と子が荒れていた時、彼女は看護専門学校の懿徳ママを務めながら、仕事と家庭の両立に奔走する職業婦人だった。彼女は子供を矯正したり頭ごなしに過ちを認めさせようとしたりすることなく、子供が必要としている時にただ寄り添った。自分の置かれている立場を認識させ、後悔のない決定を下し、たとえ間違ったとしても自分で責任を取る覚悟を持つよう導いたのである。

親としての成長は、證嚴法師の教えをしつかりと胸に刻み、自分に励んで修行し、現実にしつかりと向き合い、心配と束縛から解き放たれることでもたらされた。彼らは證嚴法師の導きの通り、子供に必要なのは「愛」であって「甘やかし」ではないということ、そして彼らを無限の「愛」で包み込みながらも、自分自身の力で世界に立ち向かう勇気を鍛え、愛をもって人に接する心を育むように導くことだった。

●慈濟看護専門学校を卒業した彭小芳は、母校で教職についた。学生の頃に感じた愛を伝え広めていきたいと言った。(写真提供・彭小芳)

世代間の交流 慈誠懿徳親子の学び

慈済看護専門学校が創立三十周年を迎えた時、懿徳ママは慈済おばあちゃんと呼べる年齢になり、看護専門学校もまた科技大学へと改制された。慈済科技大学の人文室主任である謝麗華先生シェリーフアーは、交通の発達や科学技術の進歩により、花蓮はすでに辺境ではなくなっただという。社会は大きく変化し、学生の生き方も多様化した。慈誠パパと懿徳ママたちは年齢を重ねながら若者たちと価値観や得意分野、習慣の面で交流し、思い

やり、励まし合う経験の中で互いに学び合っている。

謝先生は十数年間にわたり経験した実際の物語をもとに『青銀之間——世代交流による慈済懿徳教育物語』（参考図書で紹介）を著した。書中には、慈済懿徳会のメンバーが学生たちとの接触を通じて、自分自身の家庭や親子関係を客観的に見つめ、調整しながら、證嚴法師の期待された「菩薩の心をもって自身の子女を教育し、母親の心をもって天下衆生を愛する」という理想を成しとげた物語が綴られている。本当の親子間には親しさゆえの無礼がつきものであり、また愛ゆ

えの執着が生じる。だが慈済の子供たちは両親の近似系ともいえる慈誠パパや懿徳ママとの関係を通じて、年長者と対話する方法を学ぶのである。

毎月延べ七百人の慈誠パパと懿徳ママが花蓮に戻り、慈済の子供たちと会う。彼らは確固とした教育のパートナーであ

り、子供たちの心の支えとなる決意がある。表面上は子供たちが一方的に助けられているように見えるかもしれないが、実際には二つの異なる世代が互いの人生において交流する中で、互いに学びを得ているのである。

（慈済月刊六四〇期より）

参考図書



『青銀之間——慈懿代間教育故事』

（青年と壮年の間で——世代交流による慈済懿徳教育物語）

出版：慈済人文出版社

作者：謝麗華



母さんの善言は最も心が温まる



潘廖葉

1945年生まれ、
1987年に慈済委員に認証された。
懿徳ママのキャリア：30年

懿徳ママとして世話している子に対して客観的な立場で接し、優しい態度でコミュニケーションを取れば、より多くの本音を聞くことができ、温かさを感じてもらうことができる。「自分の子供に対して、気持ちを楽しを持って執着せず、善言を多く使って祝福すれば、子供はもっと良くなるのです」と潘廖葉さんは反省をこめて言った。

文・謝麗華 撮影・顔霖沼 訳・葉美娥

潘

さんが懿徳会で世話していた女の子、小芳から電話を受け取ったあ

の年、小芳は既に慈済護専（看護専門学校）

二年制看護学部を卒業して病院で働いて

いた。彼女は電話の向こうで泣きながら、

お父さんが南部で亡くなったと言った。

私は彼女と台北で待ち合わせ、彼女に

付き添って屏東まで行った。着いた時は

既に夜明け前の五時頃だった。家に入る

と、お兄さんと母親の二人が寄り添って
ぼんやりしていた。お父さんの遺体はま
だ家に戻っておらず、何処に置かれてい
るのか分かっていなかったのだ。

お父さんは工事現場で事故に遭って命
を落としたらしく、当時はまだ携帯電話
が普及していなかったため、潘さんは警
察で聞いてみようと提案した。いろいろ
聞き回ったところ、遺体は市立葬儀場に

安置されていることが分った。彼女は小芳とお兄さんを連れて安置所に向かい、小芳は多くの遺体の中から、黄色の雨靴を目印にお父さんの遺体を見つけた。

「彭さん、私は小芳の懿徳ママです。何も怖がることはありません。あなたはこの世との縁が尽きたのですから、あらゆる事を忘れて、落ち着いて私と一緒に念仏を唱えましょう」と潘さんは腰をかがめて、この世を去ったとはいえ初対面である一家の主人に向かつて話しかけた。

潘さんは小芳とお兄さんを母親の迎えに行かせる時、屏東の地元ボランティアが手伝いに来るまで、一人朝まで助念した。

その後、小芳一家に付き添って検察官による検死、遺体の着替え、冷凍室への搬送など複雑な事後処理を手伝った。処理すべきことを大体済ませると台北へ戻った。

「母親というのは強いものかもしれないね」と、潘さんは当時の事を思い出して言った。その時はただ小芳のために急いでお父さんの遺体を探そうと思ったそうだ。

「彼女一人で崩れてくる天井を必死で支えているような気がして、懿徳ママとして手伝ってあげたい一心でした。全く怖いとは思いませんでした」と言った。

潘さんは小芳が護専に在学した二年の間付き添い、卒業後二十年経った今でも、

よく連絡を取り合っている。

「その愛の力は目に見えませんが、今までずっと私をささえてくれました」と小芳が言った。

小芳は慈済中学校で看護師の仕事に就いた後、母校の慈済科技大学で教鞭を取っている。家庭環境の厳しい学生に出会うと、彼女は戸惑う学生の手をしっかりと握り、支えてあげたいと思うそうだ。以前、自分が懿徳ママの付き添いに温かさを感じたように。

●潘廖葉（後列左から2人目）が中学2年生の時、クラスメートと撮った写真。成績優秀な彼女は父と兄が相次いで亡くなったため、中学卒業後、進学を諦め、家計を担うことになった。

（写真提供・潘廖葉）



心配はしても煩惱を抱えない

潘さんは慈濟護專が創設された二年目から懿徳ママになった。その時は四十五歳で、今はもう七十五歳である。その間に付き添った子供たちは、各大病院の主任になっていく人もいれば、慈濟病院に勤務している人もいる。皆医療の仕事に従事してそれぞれの領域で良能を發揮しており、その多くが今でも彼女と連絡を取り合っている。

護專の学生は殆どが十五歳になって初めて家を離れるので、親が心配するのは当然であるし、心配と同時にお互い言い争いが絶えない。毎月懿徳の日

お母さんの言葉は耳に優しい

慈濟に入ってから懿徳ママになる前の潘さんは、ちょうど嫁姑関係と親子関係が深刻化して戦々恐々としていた時期にあった。

彼女は子供の頃から学校の先生になるのが夢だったので一生懸命勉強し、村で初めて台北第二女子中学に合格したが、父と兄が相次いで亡くなったため、やむを得ず進学を諦め、家計を支援するために工場で働くことになった。二十歳の時、母の言われるままに潘家に嫁いだ。姑は気性がさっぱりしていて四色牌スリーゲーム（カードゲーム）が好きで、

で花蓮に行く前、潘さんは親御さんに電話をかけて子供に言付けはないかと聞き、帰ったらまた、電話して子供の無事を報告した。

定期家庭訪問は、親御さんが懿徳ママに子供に対する心配事を話したり、子供の悩みを話してくれる機会であり、互いにその秘密を厳守して、子供を指導する適切なタイミングを待つ。親が一番心配するのは子供の交友関係や、成績が思う通りにいかないことなどである。このような経験は潘さん自身にも覚えがあった。以前の自分はせっかちな性格が原因で、子供にひどいことを言つて親子関係を悪化させたことがあったのだ。

夫は小学校しか出ていなかったからか、人情に厚い人だったが、彼女には我慢ならない習気もあった。

彼女は三人の子供が自分と同じ轍を踏まないようにと思つて、厳しく育てた。長女は母親の苦勞を見て、いつも優秀な成績を取り、自慢の子だった。長男の志明は姑に溺愛され、彼女はいつも子育てのことで姑に責められた。

長男は五年制高等専門学校の電機学科に合格しても、再受験して建国高級中学（台湾の名門高校）に受かる自信を持っていたが、彼女は息子が本気で勉強するとは信じられず、また合格した電機学科も悪くないと思い、「今のま

までは無理でしょ？大人しく専門学校に行きなさい」と冷や水を浴びせた。長男はやむを得ず専門学校に寄宿し、祭日になっても家に帰らなかつた。彼女が心配して電話をかけると、「一人はいつもちよつとしたこと言い争つた。」

「母さんは僕が小さい頃から悪い子だと言っていたけど、クラスメートに比べたら、まだまだマシだよ！」。志明はタバコ、テレビゲーム、バイクの暴走、マージャンまでをやりだし、とうとう学校の

●慈濟護專の第3期卒業生である小芳（左）は、あるイベントで感謝の心を込めて潘廖葉に花束を贈った。あの愛の温もりは目に見えないが、その影響力は今でも続いている。（撮影・曾東勝）

成績は半分以上が不合格になり、自分で休学の手続きを済ませると、彼女にそう報告した。

彼女は四十歳の時に慈濟と出会い、悩みを抱えて證嚴法師に息子のことを話した。證嚴法師は彼女に優しく、「親は子供の運命を決めることはできません。ただ良縁を広く結んで、その良縁が自分と子供に回って来るようにするしかありません。毎日子供を叱るばかりでは、子供はどうして言うことを聞いてくれるでしょう？親として、子供の幸せを祈ってあげなければ、誰が祈ってあげられるのですか？」と言った。

以前、彼女は、子供に対する期待は子



供のためだと思っていた。今は全ての執着を捨て去り、語気を改め、子供の話に最後まで耳を傾け、子供が気落ちした時に追い討ちを掛けるようなことは止めようと決心した。子供の話が終われば、先ず賞賛し、その後で自分の意見を言うが、最終的には子供の決断に任せる。志明も母の話し方が演劇しているようなのに気づいていたが、聞いていて悪い気はしなかつた。

祝福する心で子供を認めてあげれば、徐々に互いに理解し合うことができるのだと彼女は気が付いた。志明は兵役を終えた後、もう一度勉強し直し、順調に大学への転入試験に合格した。

彼女の人生は波乱に満ちたものだったが、当時、冷や水をあびせてしまった長男にとっては今でも記憶に新しく、結婚してからは母親のような子育てをしないようにと自分に警鐘を鳴らしている。

波乱を乗り越え、懿徳ママになった後、彼女は、世話している子供たちに対して

は客観的な態度で接し、優しくコミュニケーションをとり、多くの本音を聞き出すと、そこで彼らが温かさを感じていることに気付いた。親は血縁者への執着にとらわれず、子供を自由にはばたかせてこそ、親子の愛は永く続くのだと彼女は体得した。(慈済月刊六四〇期より)

(続く)

【教育に関する證嚴法師の教え】

親になるのは大変なことで、愛と教育のバランスを保つことは難しいのです。しかし、心の中の愛は表現すべきであり、この世でどのようなようにして人同士が愛し合い、交流するかを子供に知ってもらうのです。



【證嚴法師のお諭し】

◎ 訳・慈願 絵・林淑女

防疫し警戒心を高めてもパニックにならず、

真心で平安を祈ろう

警戒心を高めても、パニックになつてはならず、未だにこの病に特效薬はないが、妙薬がある。

自己管理を徹底すると共に、

敬虔な心で世の平安を祈ることである。

新

型コロナウイルスの感染拡大は既に世界百六十以上の国と地域

に及び、感染した人の数は十八万人を越えました。このウイルスは目で見ることも手で触ることもできず、まだ特效薬がありません。何時まで続くか予測もできない中で、誰もが顔色を変えるほどの不安を感じています。

この深刻な感染に対して、心配したり憂鬱になるのは無駄なことであり、先ず落ち着くことが大切です。濁っている水を動かさないでいると砂がゆつくりと沈殿していくようなものです。この時期に危険を感じ、恐怖と戸惑いを感じますが、それよりも思考を転換し、愛を發揮して智慧を高め、過去の

過ちを反省して未来の方向を探ると共に、この伝染病が速やかに過ぎ去ることを願った方がいいでしょう。

今回の伝染病の特效薬はまだ、見つかっていませんが、一つ妙薬があります。敬虔な心で世のために祈り、祝福の力はとても大きいと信じることです。また自ら目覚め、善念を高めて心を揺らぎないものにするのです。

衆生の生活は元々単純でしたが、次第に享楽を求めるようになりました。それは益々エスカレートし、能力がある限り手に入るもので生活を楽しんだ結果、環境汚染を引き起こしました。中でも美食の享受が一種の風潮になり

ました。ありとあらゆる生き物を食べるようになり、残酷で貪欲な考えが殺生の業を作り出していることに気がついていません。宿世の因果が長い間に蓄積して共業となり、大自然の反撃を招いているのです。

社会の変化は目まぐるしく、心の貪婪は知らぬ間に起きており、古き良き善を守る観念が薄れています。善と悪を天秤にかけたならば、片方の善が軽い時にはもう片方の悪業の方に傾いたままです。慈悲と喜捨を秤の両端に置いて、過去の生活を反省し、正しい方向へ向かわなければなりません。

ウイルスの源は多くが動物に由来し

ています。人類が貴い命を殺害することで口の欲を満足させているため、生命間の調和が取れなくなり、万病が発生しているのです。私たちは他の生命を守ることで人類を助けるべきであり、生霊を護りながら人類が健康になることを願うには菜食するしかありません。

無明と口の欲（食の欲望）をなくすことです。主食と雑穀、それに野菜さえあれば十分に栄養を満たすことができ、それは安心できると共に理に適っているのです。誰もが心身共に健康であれば、世の中は平安になります。天地万物は共生共存しており、殺生を戒

め、齋戒するのです。生命を護るには愛が必要であり、呼びかけ続ければ、人々は呼応してくるでしょう。

菜食は慈悲心を培います。人間に福をもたらし、社会に安定と幸福をもたらすことが即ち慈悲心なのです。病苦を見て善を結集して奉仕し、苦難を増殖させないのが慈悲です。慈悲心を持ち、「慈悲をナビゲーション」として、人々の心が道を見失わないよう、水先案内人となって果てしない大海原の中で一艘一艘の船に慈悲の灯を点し、灯台の方向へと導くのです。

ウイルスは交通機関を使う人の移動に伴って拡散します。こういう時期は

観光旅行を控え、接触による感染を減らすことで、不安に陥らないようにするのです。現代社会では家族全員が集う機会が少ないため、この機会に一家の団欒を大切にすべきです。法縁者の間では少人数でも随時、連絡を取り合い、感情を温めて智慧を高めるようにしましょう。

三月八日の世界慈濟ボランティア精進活動は防疫のために、初めてオンラインで講座を開設し、三十の国と地域の慈濟道場で二万一千人余りが参加しており、映像は十八万回も再生されました。精進日の講座内容は防疫の方法が中心で、一人ひとりが自愛すると共

に規則を守り、マスクの着用と小まめな手洗いを指導しました。厳格に自己管理すると同時に、水を無駄に使わない手洗いの方法を教えました。

今は大勢で集まることはできませんが、皆がケータイで知人に菜食と祈りを呼びかけ、励まし合うことはできません。警戒心を高めても、パニックになっではいけません。心を落ち着かせて愛の心を以て再出発するのです。医療人員が勇敢に第一線に留まり、愛を以て生命を救っています。健康な人も感謝の心を込めて敬虔に世の平安を祈りましょう。皆さん心して精進に励みみましょう。（慈濟月刊六四一期より）



大地の
守護者

お婆ちゃんブラウスを着てリサイクル活動する

チエンウエイ
マレーシアの陳為さん

マレーシア全土では1万3千人の慈済リサイクルボランティアが約千カ所のリサイクル拠点で回収資源の分類を地道に続けている。皆、学歴や生活背景にとらわれず、無報酬で取り組んでいる。奉仕の労力や苦勞を語らず、大衆に物を大切に、大地を愛しむよう呼びかける。子孫代々に美しい地球を残したいだけなのである。

◎文・黄筱哲&蔡瑜璇 訳・江愛寶&明陞 撮影・黄筱哲



縁があつてマレーシアから来た環境保全ボランティアに会うことができ、期待と喜びに溢れた。初めてセランゴール州ゴンバック県に住んでいる陳為お婆ちゃんに会った時、私たちに馴染み深い福建語で挨拶してくれ、いっそう親近感を感じた。お婆ちゃんは今年八十七歳で、腰は曲がり猫背だった。聞いてみると、四十六歳の時に交通事故に遭ったことが原因だそうだが、年を取るにつれて背骨の曲がり具合が目立つようになってきたこと。しかし、私たちを感動させたのは、それでも体の障害に愚痴をこぼしたことはなく、逆に、縁を逃さず奉仕し、毎日勤勉にリサイクル活動をして證嚴法師の呼びかけに応じ、大地に尽くしている姿だった。

陳為お婆ちゃんはいつもお婆ちゃんブラウスを着ていて、品があつて元気いっぱいである。彼女は、「全部自分で仕立てました」と自慢げに言った。お婆ちゃんにこんな才能があつたとは思ひもよらなかつた。寸法を計つて自分の服を作るだけでなく、猫背の形に沿つて裁断して仕立てるとは、全く驚いた！感服して、お婆ちゃんと記念写真を撮ることにした。カメラの前に立つてにこにこしている姿はまるで私達に「体の欠陥は私を尻込みさせることなく、ちょっと仕立て直せば見栄えがよくなります。それに、このような猫背でも環境保全の仕事には差し支えることはありません」と言っているようだった。

母の教えを引き続く

陳為お婆ちゃんはミシンの前に座って両足でペダルを踏み、両手で布の端を合わせた。その時「ダダダ」というミシンの音が部屋の中にこだまし、私たちをタイムトンネルに引き入れてお婆ちゃんの子供時代に戻った気がした。

お婆ちゃんは小さい頃から、ミシンの側に立って母親の仕事する姿を見るのが好きで、そこから少しずつ裁縫の技を身につけたのだそうだ。十歳の頃、両親が野菜畑に出た時にこっそり服を縫って、家の家計の足しにした。

十三歳からあちこちでゴムの木からゴムを採取する仕事に就き、結婚後は六人の子供を儲けたが、思いも寄らず夫は家庭に責任を持たないばかりか、ギャンブル好きで、早くにこの世を去り、結果として彼女一人に家庭の重荷がのしかかった。お婆ちゃんは六人の子供を育てるために、人の家で掃除、炊事、洗濯をし、家に帰ってから子供世話だけでなく服を仕立てる仕事をした。家計

を支えることは易しくなく、食費を切り詰めて節約し、自分や子供たちの服はいつも破れては縫い繕って着続けた。孫たちが幼い時に履いたズボンもお婆ちゃんが作ったもので、子供や孫はお婆ちゃんが大好きだ。

幼少から老年になるまで、母が身で以て教えてくれたことを引き継ぎ、前の世代の忍耐強い勤労精神を堅持している。目立った猫背は、まるで一生の重荷を背負っているかのようなのだが、今は苦しい日々を歩き終え、楽しい日々を送っているのだという。



強い意志でリサイクル活動に励む

「私の体は良くないように見えても、やる事は人よりも少なくありません」。陳為お婆ちゃんが長年心に貯めてきたことを話してくれる時、お年寄りの屈強な一面が伺い知れる。人生の殆どをあくせくして働いてきたが、不平を言わず、樂することもなく、歳をとってからリサイクル活動に参加するようになった。上人と共に地球を守りたいだけなのだ。

早朝、夜が明ける頃、陳為お婆ちゃんは大きな袋を持って家を出かけた。日々同じような「環境保全の道」である。大通りや路地を通り抜けるお婆ちゃんの後ろについて行くと、私たちからは猫背の姿しか見えない。九十度近く曲がった腰で歩いていても、息切れは聞こえず、そのスピードは何十歳も若い私たち





と比べても全然見劣りしなかった。「今日は、回収するものはありますか?」、「このガラス瓶はまだ要りますか?」或いは「おばさん、何か持っていく物がありますか?」と道々福建語で住民に聞いて回る。回収物があってもなくても、「ここにこしながら、英語で『Thank you. Thank you.』と言っただ。お婆ちゃんは背筋を伸ばせなくても、体と心の障害を克服し、環境のために強い意志で進み続け、勇敢に前を向いて自分なりの環境保全の道を切り開いている。

簡単には諦めない

お婆ちゃんは一カ所の資源回収を終えると、次の所に行って回収する。どの家または何処に回収物があるかはよく知っている。彼女は何年もこの地域で活動しているので、中華系の人だけでなく、マレー人も回収に来る時間をよく知っている。皆、お婆ちゃんが来ると、整理した回収物を出してくれる。外出する時は決まった場所に置いておき、回収しやすいようにしている。

私たちは、彼女が手押し車も他の交通手段もないのに、あれほど重い回収物をどうやって運んでいるのか不思議に思った。そこで後に着いて行くことにした。驚いたことに、彼女は忍耐力と気力で何回かに分けて家まで運んでいたのだ。荷物が重い時は全身の力を振り絞って数メートルずつ運び、力を使い果たしてしまっても、少し休んでまた始める。あらゆる回収物を家まで運んでやっ

と一段落する。しかし、休むことなく整理を始め、回収に来る慈濟ボランティアの仲間が省けるように、汚れた物は洗ってから分別する。このことからお婆ちゃんの性格を伺い知ることができる。問題に遭遇しても簡単には諦めないのだ。その上、喜んで少しでも多くやり、他人に苦勞をかけないのだ。





台湾とマレーシアのリサイクルボランティアは心が一つ

お婆ちゃんシオンの訪問が終わった二日後、現地の慈済ボランティア・王國開師ワングオカイが兄が私たちを見送ったが、お婆ちゃんはこのそりお金を王さんに渡していた。私たちが台湾から来ているのにおもてなしをできなかったのが、王さんに頼んでお茶でも飲んでもらいたいと思ったのだそう。私たちが孫のように思ってくれる優しい気持ちに心から感謝した。「真心」が溢れてはにかんだお婆ちゃんの笑顔は優しく、そこに彼女の人間性が現れていた。子供たちに対してだけでなく、どんな人に対しても分け隔てなく親切なので、お婆ちゃんを好きにならない人はいない。



今回マレーシアのセラランゴールに来て、親身な温かい人情を感じた。もしマレー語の看板を目にしたたり、近くのモスクから伝わってくるお祈りの声を聞くことがなければ、異国に来ている感じはしなかっただろう。台湾と当地のリサイクルボランティアに違いはあるのだろうかと考えていたが、三千キロも離れた遠くの国でも、慈母の愛で以て環境を守っているボランティアが居ることが分かった。あまり人目に付かず、力に限りがあっても、日々たゆまぬ信念は同じで、私たちを感動させた。
(慈済月刊六三七期より)

不老の秘訣

◎文・許素貞 訳・常樸

黙々と仕事をすする幸せ〜程廖邁さん

ていりようまい

程廖邁さん

夜 がまだ明けない午前三時過ぎ、静まりかえった大地は物音一つせ

ず静寂そのもので、雲林県西螺鎮下湳里地区の人たちはまだ眠りの中にいる。一軒の伝統的な口（けい）字構えの民家では応接間に明かりがついている。九十歳を過ぎた程廖邁さんがベッドに横たわって手足を交互に動かしながら

体操をしていた。柔軟体操を終えた程さんは、起き上がって仏前に線香を供えて読経し、朝の日課を終えると忙しい一日が始まった。日が上る前は爽やかに涼しく、朝食を食べ終えると軽やかに自転車をこいで、楽しそうに資源回収所に向かった。

十年前、程さんは村へ資源回収に来た



人に出会った。彼は慈済という基金会の人で、資源を回収して貧しい人を助けているのだと聞いた。彼女は意義のある善行だから、私もやらねばならないと思った。

「主人が生きていた時から、私は資源の回収を始めていました」。当時の程さんは、昼間は娘が作る野菜の収穫を手伝うために、早朝と夜の時間を利用してリサイクルできる物の回収に出かけていた。

近所の人たちは、それを見て彼女を嘲

●程廖邁師姑は動作がテキパキしており、自転車を漕いで楽しそうに家の近くにあるリサイクルステーションへ向かった。(撮影・張萬)

笑していたそうだ。「こんなにたくさん資源ごみを拾い、きれいに洗って、しっかりと縛って、なぜ自分で売らないの。慈済はお金が沢山あるから外国まで行って救済しているっていうじゃない」。何回

もそういう話を聞いて、程さんは腹を立てるところか、堰が切れたように相手を説き伏せにかかった。

「正直者に神宿ると言うでしょう。お金のためだけなら、私にはあちこち廻って集めに行く必要なんてありません。慈済にお金が多いと言われているのは素晴らしいことです。お金があるからこそ人助けができるのです。国内でも海外でも

人は人ですよ、同じ人間をなぜ区別するのですか。人助けはする方が気持ちがいいでしょう。あなたは救ってもらう方がいいのですか」。彼女の道理ある話に、二度と彼女を嘲笑する人はいなくなつた。

程さんは養女だった。養父母と養祖母は彼女をとっても可愛がり、勉強するよう勧めたが、勉強は好きではなく、仕事に興味をもっていた。養父母は「損なことだ。進学していれば大きくなって事務の仕事について少しは楽ができるのに」と言った。程さんは「私は力が強いから、外の作業のほうが好きです」と言った。結婚後は真面目で気が利くので、舅や姑、

夫に可愛がられた。

「私は人と口論したことがあります。」
そして菜食をしている人は気性が穏やかに
かになるということを耳にした彼女は、
せつかな性質を変えるために三十五
歳からベジタリアンになったが、養父に
叱られ、一月間実家へ帰る勇気がなかつ
た。彼女は笑いながら「養父は菜食だと
栄養不足になると思っていたので、力仕
事をする私を実は心配していたのです」
と言った。

長年、菜食してきた程さんの体は丈夫
で、一年中あちこちの農家で田植などの
仕事を手伝い、稼いだお金をすべて姑に

渡していた。「姑は私を自分の娘のよう
に可愛がってくれ、私も姑を自分の母親
のように思っていました」。

程さんには、息子と娘がいる。台中に
住んでいる息子さんは税関を定年退職し
たばかりで、教職についていたお嫁さん
も退職したので程さんに幾度も台中で一
緒に住むよう勧めた。だが程さんは「都
市にはなじめない。娘が近くに住んでい
るので、娘と婿も孝行してくれる」と言った。

田舎の生活に慣れている程さんは、自
由自在に自転車をこいで資源ごみを集め
に行っては、一つの袋がいっぱいになる
と家に戻って置き、またすぐ集めに出掛



ける。九時過ぎに昼食の用意をするため
家に帰る。昼食後はひと休みしてまた資
源ごみを集めにかけ、村の外まで行く
時もあるが、ルートは決まっていないそ
うだ。

自転車をこいで道路を横切るなんて危
ないと娘さんとお婿さんは心配してい
るが、程さんは、「道路を横切るのは大丈
夫ですよ。車が走っている時はどんなに急
いでいても無理をしませんから」と言う。

資源の回収袋が五つになるとそれを手
押し車にのせて別のボランティアの家に

●程廖邁師姑は家の東側にある古い部屋を整理し、
そこに回収した物を置いている。(撮影・張萬)

運ぶ。よく考えてみると、家の東側の部屋を片付けて回収資源置き場にすれば、行ったり来たりする必要はないではないか。

回収物を整理していると近所の仲の良い人が立って見ていたので、程さんは笑いながら「何を見ているの？早く手伝いなさいよ」と言った。それからというものの彼女が資源の回収をしているのを目にすると自発的に手伝いに来てくれるようになった。

九十歳になっても体が何処も悪くないのは、資源回収をやっているおかげだと思っている。心身ともに健康で煩惱がない

ずつ建材を束ねて紐で括り、自転車に載せて幾度も運んで、ついに全ての建材を運び終えた。

そして又管理員に聞いた。「他にもありますか。あつたらまた取りに来ますから」。管理員は目を丸くし、「あなたのようなお年寄りにそんな体力と気力があるとは大したものです。凄い。本当に不思議だ」と言って感服してしまった。

自分は幸福な人間だと程さんは思っている。二〇一六年雲林県模範母親賞という名誉を受賞し、台北で当時の馬英九総統から表彰された。「私の子育ては、大

い。この辺りでは野菜の収穫を済ませた後に必ずと言っていいほど、畑の脇に空のペットボトルが残されているので、翌日は朝早くそれを集めに行くのだという。

ある日、程さんは工事現場に建材が放置してあるのを目にした。現場の管理員に「これはもういらないのでですか？もし捨てるのでしたら私が持って帰ります」と話しかけると、管理員はこんな年寄りには運べないだろうと言いたげにこう答えた。「持っていけるなら全部あげるよ」。

「くれると言ったのだから、全部運んで見せよう」と彼女は頭を働かせ、少し

したことを教えた覚えはありませんが、ただ親として年長者として手本を示してきたので、子供たちもよく見習ってくれています」と謙遜して言った。

模範的な母親であり、更に人格者でもある程さん。「私の人生は幼い時から大人になって、老いの今までの年月のすべてが楽しかった。私は人々を愛し、人々は私を愛してくれた。何かをやれるということは幸せなことです。とても感謝しています。これからも私たちの地球のために尽力します」と力強く言った。

『快速解開「不老機密」より』



世を震撼させる災難は 人を目覚めさせる警鐘

肉類を減らし野菜を多く摂る。口から入る食べ物の全てが衆生の恨みを買うような縁を結ぶものであってはならない。

◎文・釋徳伋／訳・済運

謙遜して人を尊重する

新型コロナウイルスによる感染症が日増しに拡大し、春節の間台湾各地から来て精舎で諸々の仕事に就いていた慈濟人たちは、春節の五日目に上人にお暇をもらいました。上人は、暖かくして風邪を引かないよう、また衛生上の予防に気をつけるよう念を押ししました。

「今回の感染症に対して、驕らず、謙遜して立ち向かわなければいけません」。

「今回の感染症は人々に警戒心を引き起こしたので、皆、公共の場所ではマスクを着けるようになり、多くの娯楽施設は人の出入りが少なくなりました。人は皆、用心すると共に謙遜し、他人を尊重すべきです。皆で家族や友人に、肉類を減らして野菜を多く摂り、できれば完全に菜食することで殺生の業を減らすよう、呼びかけてください」。

「食に対する欲望から、食卓に肉がなくてはならないのはいけません。今回の感染症予防を機に、身も心も清めるのです。心を浄化すべきで、一時の食感を貪ってはいけません。六根が外部環境に触れただけで欲念を起こし、行動に駆られるのはいけません。その時こそが身心を修める好機であり、自分の健康と平穩を保障すると同時に、道心を堅持するのです。誰もが心と身を守り、互いに注意

→春節の間、静思精舎に集まった慈濟人たちは防疫体制に協力し、体温の測定や手洗い、マスクの着用などで自他共に守っていた。(撮影・邱瑞連)



を促すと共に祝福し合い、どの家でも敬虔に齋戒すれば、その思いが災難を消してくれるでしょう」。

担い、目覚めることが大事

黄恩婷師姊ホアンエンテイシベジエと慈濟国連プロジェクトチームの曾慈慧師姊ソンツワイフイは上人に昨年度の活動成果と今年度の活動計画を報告しました。

上人はこう指摘しました、「慈濟は最も単純な心でやるべき事をしてきました。初めは少人数で僅かな力で以て近い所から始め、やがて多くの有志の投入で結集した力が近くから遠くにまで及び、台湾から全世界へと広がりました。世界中の慈濟人が心を一つに世界各地で苦難を助け、五十年余りの真心のこもった奉仕によって今の慈濟が出来上がったのです」。

「世の中に苦難が多く発生し、私はずっと心穏やかでなく、毎日心

配が絶えません。最近、私は健康が思わしくなく、地球も平穩無事ではありません。災害が多く発生し、重責を担い続けなければならず、それも益々重くなっています。以前、私は皆さんに『謹んで戒め、敬虔になりなさい』と軽く言って来ましたが、ここ数日は語気を強めています。衆生の共業が災いを招いているからです。この世の災いは人間の行為が積もり積もって発生し、その行動は觀念によって突き動かされているため、災いを治めるには心の浄化が必要なのです」。

「責務はとても重いのですが、もし何もしなければ、責任を回避しているだけで、口先でしかありません。正しい方向を定めて着実に行動することが大切で、少しの誤差も許されません。毫釐の差は千里の謬り、とよく言われます。この世を良くしようと思ひ、衆生を守る閻浮樹えんぷじゅを育てようとするなら、発心したばかりであっても小さな種のように、覚悟ができ、意志を硬くして精進する限り縁は結集し、ついに大樹になるでしょう」。

▶ 慈済の各志業体は総動員して防疫体制を敷いている。特に慈済病院は春節前から各種予防措置を実施し、大林慈済病院は春節から五日目に外来を再開すると病院への出入りを厳しくし、体温の測定を行なって出入り口を制限した。(撮影・張菊芬)



ひっきりなしに続く世の災害を見て、上人は仏が言っていた「大三災（火災・水災・風災）」と「小三災（刀兵災・疫病災・飢饉災）」をいつも思い出します。今起きている戦争や疫病、飢饉が經典で言われているほど酷くなくても、小三災の始まりと見ることができません。もし、人々が目覚めなければ、この後に起きる災いはもっと多くなり、もっと酷くなるでしょう。

「ともかく、私たちは責務を担うと共に、目覚めるべきであり、全ては関連があるのです。世のために担うのはこの短い人生の間だけではありません。小さなチームでも担うことができ、『心を一つに和気藹々として互いに助け合う』精神の下に宗教を超えた責務を担うのです」。

上人は皆で縁を大切にして、国連の舞台で菜食を呼びかけ続けるように言っています。齋戒、菜食だけが殺生の業と汚染を減らし、地

球の環境を守ることができるのです。「考えてみてください。世界中の人が一日に呑み込む命は二億余りに上ります。因縁果報の観点から見れば、実に恐ろしいことです。今は楽しく食べていても、実は一口一口が恨みのある悪縁を結んでおり、その恨みの逆襲が地球規模の大災難なのです。お金さえあれば解決できることではありません。世を震撼させる災難がそこまで来ており、警鐘を鳴らしているのに人々はまだ目覚めていません。私たちは直ちに人々に無私の大愛を発揮するよう呼びかけるべきです」。

また、上人は若い人たちに責務を担うよう励ましました、「慈済が担う責務は非常に重く、これからも数多くのことをしなければなりません。若い人が熱情と使命感で任務を引き受けることに掛かっています。自分を軽く見ず、『自分しか地球を助ける人はいない』という自負で臨むべきです」。(慈済月刊六四〇期より)

04・02	<p>花蓮慈濟病院は漢方・西洋統合医療病棟を立ち上げ、本日より使用を開始した。</p>
04・06	<p>慈濟基金会と世界地球デー連盟、国連環境計画などの組織が第1回目の国際ビデオ会議を開いた。テーマは「従来型環境保全をする人と気候変動に対する改革を推進する人たちへの敬意」である。先ず、地球規模の新型コロナウイルス感染症拡大に当り、静思精舎が総動員して疫病の早期終息を祈る「祈り」を行った。続いて浄斯人間研究開発所の蔡昇倫所長が慈濟の環境保全活動とエコ製品の研究開発及び回収資源の再利用、資源の消費削減などの考え方について報告した。</p>

慈濟大記事四月 ……………

訳・済蓮



愛の防護ネットワーク

愛で防護ネットを織り成すことができるれば、デリケートな心のウイルスを包囲することができはります。一層で足りなければ、何千層、何万層の愛で作れば、愛がある所に福があり、愛は災害をなくすことができるのです。

『地球と共に生きていく』より

(撮影・蕭耀華 2020・04 台湾)
慈濟ボランティアが自宅待機者への電話ケア

04・12	<p>の曾毓淇医師と共同執筆した「透明アクリル板窓を通した個人防護具（PPE）による物理的なスクリーン」という文章が、『アメリカの救急医療ジャーナル』（the American Journal of Emergency Medicine）に掲載された。</p> <p>慈済基金会は地球規模の新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の予防行動で、「共に大愛で以て福を造り、善行しよう」と題した活動を展開した。全世界で愛の募金を募って、防疫グッズの提供と各国での慈善貧困救済の強化等を本日の「精進の日」に對外的に呼びかけた。「精進の日」活動は防疫のためにオンライン方式で行われた。14のプラットフォームを通して10の言語で同時通訳され、世界52の国と地域にある174の地域道場の4万5千人がオンラインで同時に精進した。</p>
-------	---

04・07	<p>台中慈済病院は骨髓移植病棟を設立し、本日、使用を開始した。</p>
04・08	<p>慈済基金会は「安心防疫活動」を推進して、8日と10日に「安心祝福パック」計3千5百パックを苗栗、新竹、雲林县政府に提供し、県内での自宅待機や隔離されている人たちに届ける。他に自治体職員の防疫レベル向上のために、大愛感恩科技公司が開発した防護フェースシールドと簡易体温計付きカードルーペ、布マスク、発熱チェックカードなどの防疫グッズ8百点余りを届けた。</p>
04・10	<p>台中慈済病院は新型コロナウイルス感染症への対応で、特殊隔離検査ブースを設置することで安全性の高い検査と防護具の節約を実施している。救急外来の李冠儀主任がその成果をオーストラリア・グリフィス大学公共衛生学部博士課程の顔采如及び新竹マツケイ病院</p>

04・24	04・22	
<p>全世界の慈済連絡所は新型コロナウイルス感染症の防疫活動を続けており、4月24日現在で既に38の国と地域を支援し、現地と海外合わせて1222万件に上る防疫グッズを提供した。</p>	<p>イギリス・タイムズ社高等教育特別誌は「世界で最も影響力のある大学ランキング」を発表した。ランク入りした世界85カ国の766校の中には台湾の24校が入っており、慈済大学と慈済科技大学はその中で同率の第5位だった。</p>	<p>した。また同時に、英華達会社が提供した2セットのバイタルサイン測定機器を使って、教師や学生はクラウドによる医療関連情報の管理を学習することで、早期に実習と就業ができるようになる。</p>

04・17	04・16
<p>◎慈済科技大学は南投県竹山秀伝病院と視聴方式で、協力内容の検討と就業の実習に関する協力体制の覚書を取り交わし、産学合作を強化寄贈式が行われた。</p>	<p>◎慈済基金会は内政部に2万枚の医療用手袋と1500本のアルコールスプレー、5千個の防護フェイスシールド、7千2百個の「福慧珍粥（八宝粥）」缶詰などの物資を届けた。第一線にいる防疫人員に提供すると同時に、防疫作業に携わる政府各部署への感謝の意として、本日、寄贈式が行われた。</p> <p>◎慈済基金会54周年記念は新型コロナウイルス感染症拡大予防のために全世界でオンライン方式の祈りの会が行われ、55の国と地域で延べ5万4千人が参加し、齋戒する心で感染症の早期終息と確診者及び死者の冥福を祈った。</p>

各国の連絡所

本部

971 花蓮県新城郷康樂
村精舎街 88 巷 1 号
TEL: 886-3-8266779/886-3-8059966
志業中心 (静思堂)
970 花蓮市中央路三段 703 号
TEL: 886-40510777 # 4002
0912-412-600 # 4002

花蓮慈済医学センター

970 花蓮市中央路三段 707 号
TEL: 886-3-8561825
玉里慈済病院
981 花蓮県玉里鎮民権街 1-1 号
TEL: 886-3-8882718
関山慈済病院
956 台東県関山镇和平路 125-5 号
TEL: 886-89-814880
大林慈済病院
622 嘉義県大林鎮民生路 2 号
TEL: 886-5-2648000
台北慈済病院
231 新北市新店区建国路 289 号
TEL: 886-2-66289779
台中慈済病院
427 台中市潭子区豊興路一段 88 号
TEL: 886-4-36060666
大林慈済病院
640 雲林県斗六市雲林路 2 段 2 4 8 号
TEL: 886-5-5372000

慈済大学

970 花蓮市中央路三段 701 号
TEL: 886-3-8565301

台北支部 (新店静思堂)

231 新北市新店区建国路 279 号
TEL: 886-2-22187770
慈済人文志業センター
112 台北市立德路 2 号
大愛テレビ局
TEL: 886-2-28989999
静思人文
TEL: 886-2-28989888

アメリカ

総支部 (San Dimas)
TEL: 1-909-4477799
北カリフォルニア支部
TEL: 1-408-4576969
ハワイ支部 (Honolulu)
TEL: 1-808-7378885

カナダ

TEL: 1-604-2667699

メキシコ Mexicali

TEL: 1-760-7688998

ドミニカ Santo Domingo

TEL: 1-809-5300972

ブラジル Sao Paulo

TEL: 55-11-55394091

イギリス London

TEL: 44-20-88699864

フランス Paris

TEL: 33-1-45860312

ドイツ Hamburg

TEL: 49 (40) 388439

オランダ Amsterdam

TEL: 31-629-577511

スウェーデン Goteborg

TEL: 46-31-227883

オーストリア Vienna

TEL: 43-1-7346988

南アフリカ Gauteng

TEL: 27-11-4503365

中国蘇州

TEL: 86-512-80990980

香港

TEL: 852-28937166

フィリピン Manila

TEL: 63-2-7320001

タイ Bangkok

TEL: 66-2-3281161-3

ベトナム Hochiminh

TEL: 84-8-38535001

ミャンマー Yangon

TEL: 95-1-541494

マレーシア

Penang

TEL: 604-2281013

Malaka

TEL: 606-2810818

シンガポール

TEL: 65-65829958

インドネシア Jakarta

TEL: 62-21-5055999

大愛テレビ局

TEL: 62-21-50558889

スリランカ Hambantota

TEL: 94 (0) 472256422

ヨルダン Amman

TEL: 962-6-5817305

トルコ Istanbul

TEL: 90-212-4225802

オーストラリア Sydney

TEL: 61-2-98747666

ニュージーランド

Auckland

TEL: 64-9-2716976

慈済

2020年5月15日発行・281号
中華郵政台北誌字第909號執照登記為雜誌交寄
Printed In Taiwan

発行人 釋證嚴

発行所 慈済基金会

〒112 台湾台北市北投区立德路2号

編集 慈済日本語翻訳チーム

杜張瑤珍・陳植英・黒川章子・王麗雪

電話 (886)02-2898-9000

FAX (886)02-2898-9994

E-mail: 021620@tzuchi.org.tw

慈済基金会日本支部

〒169-0072 東京都新宿区大久保 1-2-16

電話 (03)3203-5651 ~ 5653

FAX (03)3203-5674

E-mail: jptzuchi@yahoo.com.tw

tzuchi@tzuchi.jp

證嚴法師のお言葉、委員や会員の体験談、慈済に関するニュース等を日本の方々にお知らせする目的でこの小冊子を編集しました。日本語への翻訳は素人である私たちがしましたので、不備な点や、つたないところがあると思います。ご感想やご教示がいただければ幸いに存じます。(日文組編集同人)



日常生活での行動力を維持する

南アフリカ・ヨハネスブルグの地元ボランティアは、テムビサ区にリハビリルームを設立し、ケア世帯の行動不便な要介護者のために、七年前からリハビリの施療を続けている。セロさん（写真の右）は、右足の脛にある傷口が爛れて骨が見えるほどになっていたが、痛みを我慢してリハビリルームまで歩いてきた。施療に参加していた慈濟人医会の温聖鈞医師が応急手当をした後、ボランティアが大病院まで連れて行って治療を受けたことで右足の切斷を免れた。

（文、撮影・蔡凱帆 南アフリカ・ヨハネスブルグ 2020.2.22）



慈濟日本サイト

慈濟ものがたり